《メサイア》作曲の背景・歴史・現在

脳卒中で倒れ、精神的にも力尽き引退宣言をしたが…

村原京子

年末になると「《メサイア》&《第9》を聴かにゃ年は越せぬ！」と〈ハレルヤ〉に起立・感動していた筆者。身体中を走る戦慄がその後の「ヘンデル研究」へ誘ったのかもしれません。本来なら昨年&今年も数多《メサイア》が歌われた筈、コロナ禍にあって、最も制限される音楽表現形態合唱！　ならば皆様を文字で《メサイア》背景へ…。

G・F・ヘンデルは生まれ故郷ドイツ・ハレを離れ、30年間（1710〜1740）イギリス・ロンドンでオペラ創作&オペラ劇場経営に没頭。経営不振・倒産を繰り返しながらも、イギリスでイタリア・オペラを不動のものとし、40余曲のオペラ作品と上演記録を残しました。その道は平穏ではなく、オペラ人気が危うくなるとオラトリオを上演する経営者兼音楽監督。イタリア語オペラに疲れたイギリス人聴衆にとって、聖書による母国語英語オラトリオは心休まる面もあったでしょう。オペラ&オラトリオを操るヘンデルは、オペラ《デイダミア》を最後に1740年、ロンドン・オペラ界引退宣言、既に齢56歳。脳卒中で倒れ、精神的にも力尽きての引退に、世間は「ヘンデルは二度と立ち上がれない」と噂。

オペラからオラトリオへ

西に沈んだ太陽は、再び《メサイア》を掲げて東の空に。「ヘンデルを此処で終わらせてはならぬ」と再起を促したのは、3年前オラトリオ《サウル》（1738）の台本を提供したチャールズ・ジェネンズ（1700〜1773）。更なるヘンデルの才能を信じ、聖書に基づく《メサイア》台本を書き、受難週間に演奏するよう説得。休養を決め込んでいたヘンデル、ジェネンズからのテキスト提供、加えて生還へのもう一つの誘因―アイルランド総督W・ガヴェンディシュからの慈善演奏会開催依頼も彼を《メサイア》へ向かわせたのです。

《メサイア》作曲

ジェネンズの台詞に感動、時に涙しながら〝20日そこそこで書き上げた〟メサイア。

〝ヘンデル研究〟の道を開拓したクリュザンダーによって出版された原典写本《メサイア》（上掲自筆譜）に見られるように、8／22日（土）作曲開始（図1）、楽章を終える毎に日付が記載され、第1部8／28終了（図2）、9月6日迄に更に107頁（第II部〝ハレルヤ〟最終小節迄）、9月12日

図1

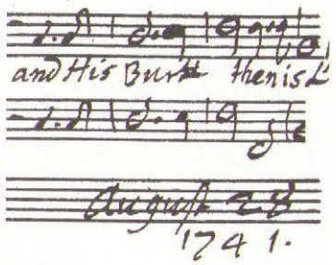
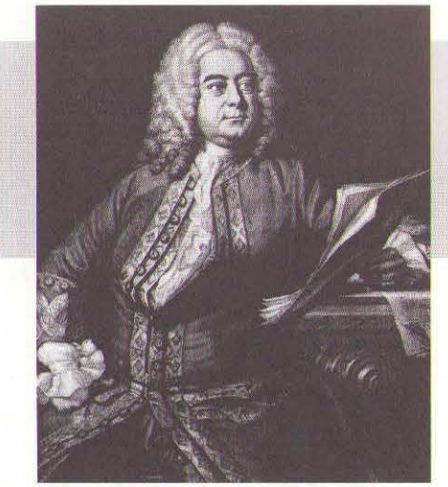
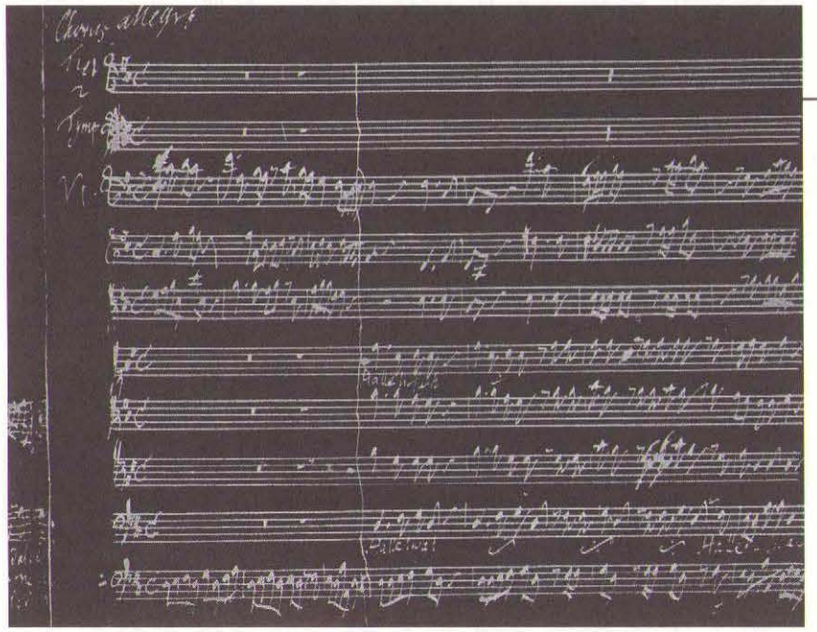


図2

《メサイア》とヘンデル



ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル
（Georg Friedrich Händel 1685-1759）



《メサイア》の一部「ハレルヤ・コーラス」の草稿（The British Museum, London）

＊特別企画（1）

に第Ⅲ部を終え（図3）、全259頁完。更に楽器編成検討・内声の充実に2日間を要し9月14日完成！　あの膨大な作品を24日間で完成させるとは！

召使が運ぶ食事にも殆ど手を付けず、寝食忘れ霊感に憑かれた様に書いたと言う《メサイア》。とは言え全てが新しく作曲されたのでは無く、自作からの転用も多々、それ故、完成度の高い《メサイア》となったのです。

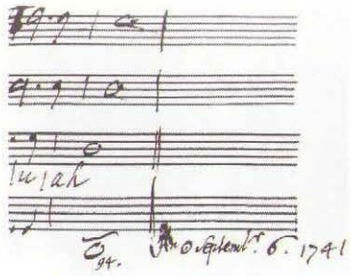


図3

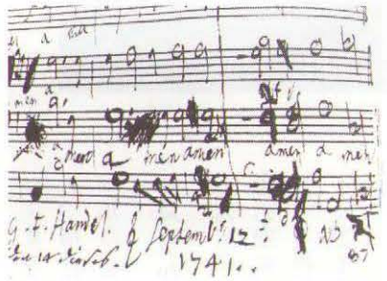


図4

《メサイア》ダブリン初演

ダブリン・シーズンの為にオルガニスト&歌手数名を伴って、1741年11月18日ダブリン到着。即《メサイア》と思いきや、12月のコンサートシーズンは初期のオラトリオ《エステル》他、世俗合唱曲等々。其の儘越年1742年ダブリン第2シーズンにも《メサイア》は現れず…、遂に3月27日ダブリンジャーナル紙上発表。「監獄の囚人救済とステファン街マーサー病院等支援の為、4月12日月曜日、フィッシャンブル街ミュージックホールで《メサイア》というヘンデル氏の新しいオラトリオが演奏されます。2つの大聖堂の聖歌隊の紳士方が賛助出演、ヘンデル氏によるオルガン・コンチェルトも演奏」チケット：半ギニー（リハーサルチケット付き）、彼は復活祭時期を意識したに違いありません。その後も新聞は再三メサイア宣伝、リハーサル翌日のジャーナルは前日の演奏賛辞の後「N・B（注意）：高貴な方々の要望により演奏会は13日木曜日に延期。開場：11時、開演：12時（中略）ご婦人方はフープ無しで、殿方もサーベル無しでご来場下さい」演奏会後も新聞にはヘンデル&歌手達への賛辞は続き、400ポンドの収益金は三慈善事業にそれぞれ127ポンドが献納されたと報告。

ロンドン音楽界復帰

《メサイア》ダブリン初演で精気を得たヘンデルはロンドンに戻り、《メサイア》作曲直後密かに手掛けていたオラトリオの仕上げに専念。四旬節を通して6回のオラトリオ上演を告げ、2月18日《サムソン》で開幕。国王&ロンドンの貴族達の注目を取り戻し、5回の《サムソン》公演が続き、残る1回は？　恐らく彼は人気が戻った好機に《メサイア》を企んでいたのでしょう。

《メサイア》ロンドン初演

《サムソン》で人気を取り戻したヘンデルは、漸く3月19日《メサイア》ロンドン初演を決意。「1743年3月19日ジャーナル：来週水曜日（23日）コヴェント・ガーデン劇場で《新しい宗教オラトリオ》が演奏されます、開演18時」《メサイア》というタイトルを使わず。かつての《エステル》《エジプトのイスラエル人》《サウル》における劇場でのオラトリオ上演に対する非難がよぎったに違いありません。ダブリンでは自由に使っていた《メサイア》。人気ソリストを入れ、タイトルへの気遣いにも拘らず、即刻新聞投稿には「オラトリオとは宗教的行為でしょうか。宗教的行為であるならばお尋ねしたい、劇場がそれを演奏する寺院に相応しいでしょうか？　又そこで演奏する人々が神の御言葉を伝える聖職者たり得るのでしょうか？　旧約聖書が汚され、神がエホバの名によって汚されたばかりでなく、新約聖書が加えられ…（中略）どんな作品か存じませんが、上演の場所と演奏者がそれに相応しいのでしょうか」。こうした人々の感情を損ねる事を考え、慎重に《新しい宗教的オラトリオ》としたヘンデルでしたが…。ロンドン初演に関しては各新聞共沈黙を守り、3回の演奏に留まったという記録が

ロンドン《メサイア》の窮地を物語っています。とは言え、ロンドン初演に於いて、その後の《メサイア》演奏形態に及ぼす画期的出来事―第2部最終曲〈ハレルヤ〉が始まると聴衆が起立する演奏形態―が此処に始まったのです。〈ハレルヤ〉の"Hallelujah for the Lord Got Omnipotento reigneth"万物の支配者であり、我々の主たる神"が始まると、国王ジョージⅡ世が立ち上がられ、聴衆はそれに続いた。国王が立たれたのに民が座った儘ではおれない、全能の神を讃えている箇所で座っていては…等々。劇場でオラトリオ？　《メサイア》？　という非難の中、ヘンデルお気に入りの国王が彼に与える事の出来た称賛だったのではないでしょうか。これが後世のメサイアに及ぼした心温まる良き演奏形態だと信ずる筆者ですが、近年、我国ではこうした伝統ある聴衆表現が廃れてきている様な…寂し！

毎年、初演地で初演日（4月13日）に開催されているダブリン市民《メサイア》（著者撮影）

世紀を超えて現代迄続く《メサイア》演奏

最後に《メサイア》初演地ダブリン、ヘンデル活躍地ロンドン、生まれ故郷ドイツ・ハレの《メサイア》演奏時期・状況、演奏形態等の現状を綴る事にしましょう。

初演地：アイルランド、ダブリン

《メサイア》初演地アイルランド・ダブリンは、《メサイア》誕生地として例年初演日4月13日、「市民メサイア」開催。当時ミュージックホールが在ったフィッシャンブル通りを全面通行止め、早朝からステージ・トラックが来て準備。ホール跡（？）と想定される場所に建っているその名も「Handel Hotel」の前。（筆者はこの小さなホテルの2階前面中央の部屋を確保、準備を眺め、通り周辺を歩き回り…）トラックの荷台ステージでリハが始まり…午後になると人人人、道路・ビルの窓満杯。数多のメサイア愛好家が楽譜を手に集まり、感動のスタート！　共に口ずさみ、〈ハレルヤ〉万歳！　ダブリンは〈市民メサイア〉を守り続けて行く事が"市政・市制"となっています。

活躍地：イギリス、ロンドン

ヘンデルがロンドンで《メサイア》を演奏したのは四旬節（復活祭前後6週間）、現在も3月末～4月が《メサイア》演奏時期、ロイヤルアルバート・ホールでは毎年この時期に《メサイア》が演奏されます。会場の一部が合唱席に当てられる事もあり、超豪華・荘厳な大合唱〈ハレルヤ〉に身震いさせられる圧巻。舞台を囲んで客席が天上近くまで及ぶ収容人数8，000人内外のヴィンヤード型ホールの音響で聴く《メサイア》、毎年聴きたい《メサイア》！

ヘンデル生地：ドイツ、ハレ

17歳でハレを出てハンブルグで修業、その後イタリアに学び、イギリスで活躍・帰化、コスモポリタン音楽人生を送ったヘンデルに対して、生地の対応は少々遅れていましたが、彼の誕生日2月23日の週を〈メサイア〉週とし、世界中からコーラスメンバーを募り（難関競争率）、練習・本番（土曜日）を迎え、アンコールの形で聴衆共に万歳しながら〈ハレルヤ〉を歌う、開かれた《メサイア》コンサートを続けています。共に歌いたいと思わせる《メサイア》です。

特別寄稿

《メサイア》の魅力と聴きどころ

ベートーヴェンも愛した《メサイア》

鈴木秀美

今年度から、神戸市室内管弦楽団（KCCO、もと『室内合奏団』）の音楽監督をお引き受けした。私は元々神戸出身であり、オランダへ渡る前に合奏団の創立メンバーでもあったので、約40年の紆余曲折を経てこの仕事をいただいたのは嬉しく、また感慨深い。

神戸市の文化振興財団には、このオーケストラともう1つ『混声合唱団』が属している。こちらも今年から監督が代わって佐藤正浩氏。スズキ・サトウとこれ以上一般的になり得ない名前のタッグで、しかし最高に新鮮な音楽をお届けしようと色々目論んでいる。

合唱団と小規模のオーケストラがそこにあれば、《メサイア》を一緒にやろうというのは誰でも思いつくのではなかろうか。個人的には、今まで『年末恒例』になっていなかったことの方が驚きである。《メサイア》の本邦初演は1929年らしいが、ヘンデル当時の楽器や演奏習慣・楽譜等、曲を取りまく情勢を考慮するようになってきたのは1970年代の終わりか80年代に入ってからだろう。私自身、それから何度弾いたことか数え切れない。

多くの古楽（オーケストラ）奏者にとって《メサイア》は、一般的シンフォニー・オーケストラの『年末の第九』に似た存在である。というのも、古楽の動きが始まった最初のうちは大きなものをやろうと思っても、受難曲や大きなミサ、オラトリオ等をやるには奏者も楽器も、そして腕も情報も足りず、言葉は悪いが《メサイア》は「でも・しか」的存在だったのである。合唱もソロも決して簡単なわけではないが、（皆少しは知っているハズの）英語であり、（モーツァルト版、プラウト版などでない限り）必要な楽器が少なくて経済的なこともたぶん大いに関係し、クリスマスのストーリーが含まれることもあって年末に多く取り上げられるようになってきた。この作品は元々、教会の外で演奏される宗教曲、言わばあまり肩が凝らずに聴ける聖書の物語とでもいうべきもので、それも広く気に入られる要素となっただろう。

『第九』にも同じ事が言えるが、どんなものでも良く知っているものを『新鮮に』感じるのは難しい。それには徹底的にディテールを掘り下げてゆくのが最良である。『神は（芸術は）細部に宿る』という。

英語ということもあって英米ほか英語圏でのみ知られているものと考えがちだが、歴史的にはそうでもないようだ。18世紀終わり頃から19世紀にかけてのウィーンでも、ヘンデルの音楽を人々に知らしめようとする動きがあった。音楽史上に暗躍するファン・スヴィーテン男爵や、ベートーヴェンのパトロンの1人として知られるリヒノフスキー伯爵の屋敷では様々なヘンデル作品が紹介されたらしいし、コンサート・ホールでも、モーツァルトの《レクイエム》とヘンデルのオラトリオは度々演奏されたらしい。そのベートーヴェンがヘンデルを大変尊敬し、《メサイア》を非常に高く評価していたことはあまり知られていないのではないか。最晩年の死の床にあった時、医師に、もし自分を助けられる医者がいるなら"His name shall be called wonderful"と《メサイア》のアリアの歌詞から取って英語で答えたという驚きのエピソードもある。この辺りの事情は昨年出版された『ベートーヴェンとバロック音楽』（越懸澤麻衣著、音楽之友社）に詳しい。

鈴木秀美（©K.Miura）

《メサイア（＝メシア＝救世主の意）》は大きく3部分に分かれ、それぞれ内容の中心は降誕・受難・復活以降だが、受難曲のように正確に聖書の文言によるものではない。レチタティーヴォ（和音付き朗誦）は殆どなく、合唱曲とソロ曲が「オペラ作曲家」ヘンデルの計画によってうまく配置されている。もちろん、合唱があるときは天の軍勢、またあるときは『十字架につけろ！』と叫ぶ群衆等々と様々な役割を果たすことはJ・S・バッハの受難曲等にも共通しているし、アリアがそれぞれの場面に応じて人の想いを切々と訴えかけることも同様である。アリアは同時にストーリーを進める役割も持っている。

オーケストラの楽器は限られたもので、弦楽器にオーボエが加わった基本の他にはトランペットとティンパニが入るだけである。もちろんそれらは有名な《ハレルヤ・コーラス》や終曲など、主の栄光、力強さを表すものとして不可欠だが、トランペットには降誕のストーリーに現れる「天の軍勢」を表すことや、「黙示録」にあるラッパの響きなど、象徴的な意味もあって重要である。

究極的にはどんなものでもそうだが、言語と無関係な音楽（少なくともヨーロッパの）は存在しない。発音や文章の出来方はもちろんだが、それぞれの言葉が持つ響きや音色、うねりのようなものは歌手の入らない器楽でも大いに関係する。ヘンデル（彼はイギリスに帰化したのでジョージ・フレデリック・ハンデル）の頃の英語が、そしてステージでそれを発音かるときにはどうあるべきなのか、これはかなり難しい問題で言語の専門家の助けが大いに必要だが、その辺りも可能な限り詰めていきたいと思う。

今回初めて一緒に仕事する合唱団の皆さんと、気心も知れたソリスト達、そしてKCCOの皆さんと共に、『皆知っている曲』をどうやるのが一番良いのか、ああでもないこうでもないとたくさん話ができることをとても楽しみにしている。

屈指の名作メサイア、神戸に響き渡る
鈴木秀美 指揮　G. F.ヘンデル：オラトリオ **《メサイア》** HWV56（字幕付）

鈴木秀美（©K.Miura）

ソプラノ：中江早希（©井村重人）

アルト：中嶋俊晴（カウンターテノール）

テノール：櫻田亮（©Ribaltaluce）

バス：氷見健一郎（©井村重人）

12月12日（日）14時 神戸文化ホール 中ホール
管弦楽：神戸市室内管弦楽団　合唱：神戸市混声合唱団
全席指定（税込）　一般￥4,000　U25（25歳以下）￥1,000
（公財）神戸市民文化振興財団 ☎078-361-7241　https://www.kobe-ensou.jp

特別寄稿

神戸市室内管弦楽団＆神戸市混声合唱団団員

《メサイア》に想う

神戸市室内管弦楽団＆神戸市合唱団団員

神戸市室内管弦楽団 ヴァイオリン副首席 井上隆平

神戸市室内管弦楽団のリハーサルにおける鈴木秀美音楽監督の一音一音に対する要求は、細やか且つ明確である。ヴィヴラートや弓使い等々、具体的な指示によりオーケストラの響きは見るうちに統率されてゆく。作品への深い愛情と鋭い洞察があればこその為(な)せる技かと、私は感じている。

本年12月、合同定期演奏会において、いよいよ鈴木監督と神戸市混声合唱団との初共演が実現する。今回の演奏会では、両団がどのように融合するのかが楽しみである。

演目の「メサイア」は、両団にとって大切なレパートリーとしてこれまでも演奏してきた曲である。イエス・キリストの誕生、受難、復活という壮大なストーリーを描く本作品こそ、新体制となった両団の新たな幕開けを飾るにふさわしいと私は考えている。

私たちが全身全霊をかけてお届けする、新生「メサイア」に是非ご期待頂きたい。

神戸市室内管弦楽団 ヴィオラ首席 亀井宏子

「メサイア」は、室内管弦楽団にとって格別の意味を持つ楽曲、という思いでいる。小編成ならではの緻密なアンサンブルと純粋な響きが、作曲者ヘンデルのアイデアを実現させるものであることは間違いない。

12月12日に開催する「メサイア」の公演は、神戸市室内管弦楽団創立40周年の本年4月に就任した鈴木秀美音楽監督指揮による、神戸市混声合唱団との合同定期演奏会である。

過去にも幾度となく採り上げた楽曲ではあるが、今回は、鈴木新監督の追究する古楽の様式を基にオリジナル楽器の響きを加え、輪郭の鮮明な、それでいて自然な息遣いで楽曲との距離をより近く感じられる、そんな「メサイア」がイメージされる。そして、管弦楽団と合唱団の両方を有する団だからこそ創ることができる、深く密度の濃い音楽を紡ぎ出せればと願う。

およそ3世紀もの遥かなる時を超えて奏でられる音楽を、今この世界に拡がる苦難からほんの一瞬でも心を解放する『救世主』の使命を帯びたメッセンジャーとして、神戸から発信する。

神戸市混声合唱団 ソプラノ・パートリーダー 端山梨奈

神戸市混声合唱団は、普段ソリストとして活動している歌手の集団。ソリストでありながら合唱団としての専門性を持つことは一見矛盾したことのように思われがちだが、ソリストとして成立する高い歌唱技術を持ち寄ることでより高いクオリティのハーモニーを聴かせることが出来る。

今回は外部から旬のソリストを招聘することになっており、よりパワフルでプロフェッショナルな、世界に通用する「メサイア」をお聴かせ出来るのではと期待している。

バロック音楽のスペシャリストである鈴木秀美音楽監督のもとで、この超大作への理解を深める時間は演奏家として幸福なものであり、この幸福をお客様と共有できる日を心から楽しみにしている。

♪

神戸市室内管弦楽団（©米田フォト）

神戸市混声合唱団 テノール・パートリーダー 眞木喜規

神戸では戦前から長らく親しまれてきた「メサイア」。演奏史を紐解いてみると、長井斉氏や大澤壽人氏がその先鞭(せんべん)を付けてきた歴史があり、各大学や愛好家の方々によって長年に渡って歌い継がれてきた。

神戸市混声合唱団にとっても室内管弦楽団と共に歴代の指揮者によって定期演奏会等で度々取り上げられてきた大切なレパートリーである。

今回指揮を執るのは室内管弦楽団新音楽監督の鈴木秀美氏。バロック・チェロ奏者、指揮者として世界的活躍をされている事で既にお馴染み。意外なことに、実は合唱団として本格的な古楽演奏法にはこれまで取り組んだ事が無く、初の試みとなる。これは合唱団の佐藤正浩新音楽監督が標榜(ひょうぼう)する「様々なスタイルに対応できる合唱団」としての演奏が今回私たちとしては注目して頂きたいポイントである。

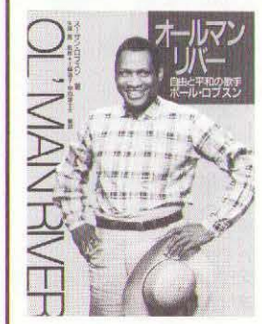
神戸市混声合唱団（©小澤秀之）

OL' MAN RIVER

オールマン・リバー

スーザン・ロブスン著

定価 6,407円（本体5,825円＋10%税）



ポール・ロブスンは世界的な歌手で俳優で、同時に早くから黒人差別撤廃運動の先駆者であった。生活困難な時でも、彼は決して自由と平和のために屈しなかった。本書は「ポール・ロブスン生誕100周年日本委員会の事業として出版するものです。

ヘンデルの生涯、音楽の特長、そして影響

ヘンデルがオペラに代わってロンドンの聴衆の心を掴んだのがオラトリオだった

保延裕史

ヘンデルの生涯

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル（1685～1759）は現ザクセン＝アンハルト州のハレで生まれた。幼少期から音楽の才能を見せ、教会のオルガンを達者に弾いたという。ヘンデルの父親は当地の領主ヴァイセンフェルス公に仕える医者（床屋）で、息子が音楽家ではなく法律家になることを望んだが、公爵はヘンデルの楽才を認め援助を与えた。彼は1703年にハンブルクに移り、ラインハルト・カイザーが取り仕切るオペラでヴァイオリン奏者、チェンバロ奏者として活躍し1705年、最初の自作オペラ「アルミーラ」を上演して成功を収めた。社交的だった彼はこの頃テレマン（1681～1767）、マッテゾン（1681～1764）と親しく交友した。彼は停滞を嫌い、1706年にはイタリアへ行き、ローマ、ヴェネチア、ナポリ、フィレンツェ各地でオペラを上演し、「ロドリーゴ」、「アグリッピーナ」など人気を得た。一方コレッリ、スカルラッティと知り合い、オルガン、チェンバロ奏者としても喝采を浴びた。

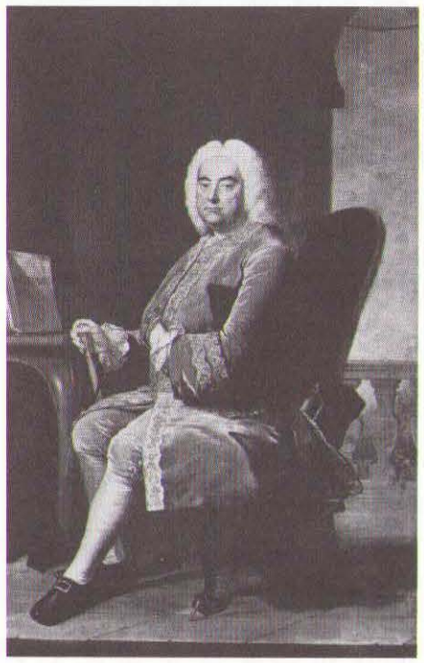
1710年、ヘンデルはハノーファーの宮廷楽長の職に就いた。ハノーファーは劇場もありイタリア音楽が盛んで、ヘンデルはオペラ上演も期待されたが、彼はデュッセルドルフからオランダを経てイギリスに渡った。1711年ロンドンで上演した「リナルド」は大好評で、その後一度はハノーファーに戻ったものの翌年再びロンドンに赴き、結局、終生この地に留まることになった。ロンドンで彼のオペラは「忠実な羊飼い」をはじめ興行的に成功し、1720年設立された「王立音楽アカデミー」を中心に生涯40曲ものオペラを作曲した。この間奇しくも1714年ヘンデルが半ば職場放棄したハノーファーの選帝侯がジョージ1世としてイギリス国王に即位した。かつてはヘンデルが関係修復のために「水上の音楽」を書いたという逸話があったが今日では否定されている。1724年にイギリスに帰化したヘンデルは王立礼拝堂付作曲家、宮廷作曲家に任命された。しかし、ロンドンでのオペラ興行は作曲家ボノンチーニら反対勢力が現れ、また聴衆の好みの変化もあって失速し、何回か経済的な危機に見舞われた。

ヘンデルがオペラに代わってロンドンの聴衆の心を掴んだのがオラトリオだった。「サウル」「ソロモン」や「ユダス・マカベウス」のように、主に旧約聖書に登場する英雄が題材のオラトリオは劇場で演奏され、装置と衣裳を伴わないオペラそのものだった。ことに晩年まで人気を誇った「メサイア」（1741）もキリストの誕生、受難と復活がテーマだが、教会音楽ではなく劇場作品だ。国教会の気風とロンドン市民の嗜好がヘンデルのオラトリオを歓迎したのだった。ヘンデルは1751には視力を失い、自作の再演などしていたが1759年死去した。

ヘンデルの音楽の特長

ヘンデルはハレで生まれ、ハンブルクでオペラ作曲家として成功、イタリアで実力を蓄え鍵盤楽器奏者でも名声を博した。しかしハノーファーの宮廷楽長に留まらずイギリスでオペラ、王室のための音楽そしてオラトリオで当時随一の大音楽家としてヨーロッパ中にその名を轟かせた。まさに国際人としての活躍だった。作風としては明朗で、聴き手に幸福感を与える抒情性を持っており、オペラやオラトリオでは優れた劇場感覚を発揮し、また合奏協奏曲や「王宮の花火の音楽」のような機会音楽、チェンバロ曲を多く残した。

ヘンデルの人生と創作態度は、同年生まれのヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685～1750）とよく比較される。バッハは中部ドイツを一生離れることなく家族を養い、宮廷と教会に属したが、ヘンデルはヨーロッパを巡りイギリスで生涯独身を通した。バッハが内面の充実を理想として器楽、声楽に自己練磨の集成を目的に創作を続けたのに対し。ヘンデルは王侯貴族、市民の耳をいかに喜ばせるかを第一に創作に励んだのだった。20世紀後半のバロック音楽復興の立役者の1人、指揮者アーノンクールは著書「古楽とは何か・言語としての音楽」（樋口隆一、許光俊訳、音楽之友社）の中で、『ヘンデルは彼の時代における最初の偉大な世界人であった…彼が大成功した大きな理由は、彼がその時々の聴衆が理解できる音楽言語を用いて音楽を書いたことである…彼は古典派時代以前、社会的にも経済的にも成功を収めた数少ない作曲家の1人だった。出版社との共同作業が彼の作品を大いに流通させ、確実な報酬を約束したのは間違いない』と書いている。



ヘンデルの肖像画
（Thomas Hudson 画、油絵、National Portrait Gallery, London）

後世への影響

存命中畏敬と人気を得たヘンデルの音楽は時代の波をかいくぐっても命脈を保ち続けた。古典派の時代、モーツァルトとハイドンの合唱作曲法はヘンデルが模範だった。またベートーヴェンはヘンデルを最大限尊敬し、「ユダス・マカベウス」の「見よ、勇者は帰る」の旋律でチェロとピアノのための変奏曲を作曲している。これらは大バッハの鍵盤作品が時代遅れとして練習曲としか認識されず、受難曲はほぼ100年後にメンデルスゾーンによって蘇演されるまで人々から忘れ去られたのとは対照的だ。また「メサイア」は継続的に演奏され、C・P・E・バッハは何度か指揮した記録があり、ロンドン、ウィーンではヘンデルのオラトリオは人気を保ち続けた。モーツァルト、ハイドンがヘンデルを敬愛した理由がオランダ出身のオーストリア外交官スヴィーテン男爵ゴットフリート（1733～1803）の存在だった。音楽愛好家で作曲もした男爵は1786年、「音楽を愛する貴族のための協会」を設立して演奏会を行うようになった。スヴィーテン男爵の依頼でモーツァルトは、「エイシスとガラテア」（1788年）や「メサイア」（1789年）などを当時の楽器や演奏習慣に合わせて編曲した。因みに「天地創造」「四季」は男爵のドイツ語翻訳によるテクストが晩年のハイドンに創作意欲を与えたのだった。

聴いておきたい《メサイア》のCD&DVD

ダブリン初演版による録音のシェルヘン指揮ウィーン国立歌劇場管

野崎正俊

◎ヘルマン・シェルヘン指揮ウィーン国立歌劇場管、ウィーン・アカデミー唱、ピエレット・アラリー（S）、ナン・メリマン（A）、レオポルド・シモノー（T）、リチャード・スタンデン（Bs）（WEST）

『メサイア』は1742年にアイルランドのダブリンの慈善演奏会で初演されたが、ヘンデルの生前から演奏の度に会場や出演者の条件に合わせて何度も改訂されているので、決定版というのは存在しない。そもそも管楽器の使用は控えめで、金管はトランペットが部分的に活躍するだけだった。そのダブリン初演版による録音がこのシェルヘンの演奏である。シェルヘンは個性的かつ独善的な解釈の指揮者として知られるが、ここでの彼は比較的穏健な解釈で、恣意的な指揮は控えられ、気分に流されることはない。

◎カール・リヒター指揮ロンドン・フィルハーモニー管、ジョン・オールディス唱、ヘレン・ドナート（S）、アンナ・レイノルズ（Ms）、ステュアート・バロウズ（T）、ドナルド・マッキンタイア（Br）（DG）

バッハ指揮者として高名だったリヒターだけに、冒頭のアインザッツから強烈なアクセントが効いており、いつものリヒターらしい堅固なメリハリと大胆な強弱で貫かれている。それでも手兵のミュンヘン・バッハ管弦楽団と合唱団を率いているわけではないので、彼としては比較的大人しい演奏といえるかも知れない。それはともかくリヒターの集中力の高さはやはり見事で、バロックの枠組みからは離れていない。独唱陣の力唱は立派だが、マッキンタイアの歌にはあくの強さがみられる。

◎チャールズ・マッケラス指揮ウィーン放送響・唱、エディト・マティス（S）、ビルギット・フィンニレ（A）、ペーター・シュライアー（T）、テオ・アダム（Bs）（Arch）

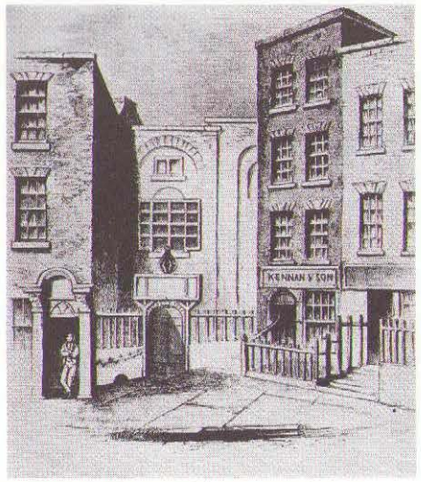
モーツァルト編曲版による演奏である。ウィーンの貴族の館で演奏されるための1789年の編曲で、全体の構成やオーケストレーションはコンパクトにまとめられている。モーツァルト自身が付けたものではないにしても、K572という作品番号を持つだけに、ウィーン古典音楽らしい味わいを持っている。マッケラスの指揮は丁寧で、ドイツ語訳の歌詞を生かしたドイツ・スタイルの堅実な演奏としての品位がある。マティス以下独唱者が心を込めて歌っているのが印象深い。

◎コリン・デイヴィス指揮バイエルン放送響・唱、マーガレット・プライス（S）、ハンナ・シュヴァルツ（A）、ステュアート・バロウズ（T）、サイモン・エステス（Bs-Br）（PH）

これといった特別な個性は持たないものの、デイヴィスの指揮はさすがに巨匠的な風格に溢れた安定感があり、一般的な意味でのコンサート・スタイルの見本ともいうべきで、アマチュア合唱団が範にするに足るタイプの水準の高い演奏と言えるだろう。その点で教会音楽ではない宗教曲としてのこの曲の本質にも合致している。『メサイア』に関心がある人ならば、一度は耳にして置く価値がある。

◎トマス・ビーチャム指揮ロイヤル・フィルハーモニー管・唱、ジェニファー・ヴィヴィアン（S）、モニカ・シンクレア（Ms）、ジョン・ヴィッカーズ（T）、ジョルジョ・トッツィ（Bs）（RCA）

ヘンデルのオラトリオは、教会で歌われる宗教曲ではなく、劇場におけるコンサート用の作品であり、オペラに近い劇的な性格も持ち合わせている。それを強調したのがこの演奏である。ビーチャムは1959年の録音に当たって、名指揮者ユージン・グーセンスにモダン・オーケストラの機能をフルに発揮出来るような編曲を依頼した。こうして完成したのがこの版で、金管が大活躍し、「ハレルヤ・コーラス」ではシンバルまで派手に鳴らされる。独唱者の歌のスタイルといい、まさに劇場オラトリオとしての面が強調されている。



「メサイア」が初演されたダブリンのニールズ音楽堂

◎マルク・ミンコフスキ指揮ルーヴル音楽隊・同唱、リン・ドーソン／ニコール・ヒーストン（S）、マグダレーナ・コジェナー（Ms）、シャーロット・ヘリカント（A）、ブライアン・アサワ（C-T）、ジョン・マーク・エインズリー（T）、ラッセル・スミス（Br）、ブライアン・バナタイン＝スコット（Bs）（Arch）

ミンコフスキが満を持して録音したヘンデルの大作である。ピリオド楽器の手兵を率いた彼の演奏は、あくまでも音楽の本質を究めようとする誠実さがある。演奏は十分にこなれていて少しも無理な所がないのに加え、弾むようなリズムの上にこまかな音の動きに柔軟さがある。暖かい情感に溢れているのも特徴と言えよう。金管はトランペット、ホルン各2本だけだが「ハレルヤ・コーラス」は細やかなダイナミズムの上に速めのテンポで歌われて十分な効果を上げており、独唱は各パート2名が歌い分けるなど丁寧な音楽作りが心掛けられている。

◎クリストファー・ホグウッド指揮エンシェント室内管、ウェストミンスター大聖堂聖歌隊、ジュディス・ネルソン／エマ・カークビー（S）、キャロライン・ワトキンソン（A）、ポール・エリオット（T）、デイヴィッド・トーマス（Bs）（W）

ホグウッドはこれとは別に同じオーケストラ、独唱者たちとCDを録音しているが、これはその3年後の1982年にBBCテレビ用にウェストミンスター大聖堂で収録された映像のDVD化である。コーラスの女声パートはソプラノがボーイ・ソプラノ、アルトも男声が歌っており、使用されている楽譜はホグウッドのCDと同じ1754年の捨子養育院版で、この時『メサイア』が養育院の附属教会で初めて宗教的オラトリオとして演奏された。古楽オーケストラをバックにして、ノン・ヴィブラート唱法のネルソン以下の歌唱が素晴らしく、この曲の本来あるべき姿を再現していると言えよう。バロック・トロンボーンの凄味のある迫力も聴きものである。

◎エルヴェ・ニケ指揮コンセール・スピリチュエル（合唱共）、サンドリーヌ・ピオー（S）、アンテア・ピシャニク（Ms）、クレシミル・シュピツェル（T）、ボジダル・スミリャニチ（Bs-Br）（Versailles）

これも1754年の捨子養育院版による演奏で、観客を入れたヴェルサイユ旧王室歌劇場でのライヴ映像である。ニケの指揮は音楽を大胆に捉えながら、細部まで入念なアゴーギクを付けて流れの良い音楽を作っている。ことさら人を驚かせるような演奏ではないにしても、ここにはニケがバロック音楽と言う枠に捉われることなく、音楽に対するロマンともいえる気迫が漂っている。

これだけは聴いておきたい ヘンデルの名作とCD&DVD

ラスキーヌの明快なハープのソロが際立つ ハープ協奏曲は珠玉にふさわしい

野崎正俊

◎『水上の音楽』、『王宮の花火の音楽』

この2曲はいずれも王宮の舟遊び、あるいは花火大会という野外演奏用の作品として書かれ、CDでもカップリングされることが多い。徹底的にバロック音楽としての綿密な考証に基づく大胆な演奏は、エルヴェ・ニケ指揮コンセール・スピリチュエル（Glossa）に代表される。ピリオド管楽器だけでも70名を超え、総計百名からなる合奏の壮観さに圧倒される。ジョン・エリオット・ガーディナー指揮イングリッシュ・バロック・ソロイスツ（Er）は『水上の音楽』だけだが、バロック的な手法を取り入れた解釈ですっきりと整理された演奏である。旧ヘンデル全集のクリュザンダー版による『水上の音楽』にはエドゥアルト・ファン・ベイヌム指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管（PH）が大らかな表情で、いかにもヘンデルにふさわしい。

◎合奏協奏曲作品3&6

6曲から成る作品3はオーボエ協奏曲とも呼ばれるが、それは独奏木管楽器群の中でオーボエの多彩な活躍ぶりが目立つための愛称である。CDは数多く、まずトレヴァー・ピノック指揮イングリッシュ・コンサート（Arch）が洗練された演奏である。ジーン・ラモン率いるターフェルムジーク・バロック管（SC）はもう少し素朴で、ドイツのバロック音楽という性格が強い。作品6のホルスト＝タヌ・マルグラーフ指揮ハレ・ヘンデル音楽祭管（Berlin）はモダン楽器による演奏だが、ドイツ・スタイルの伝統を伝える堅実さで忘れられない。

◎オルガン協奏曲作品4

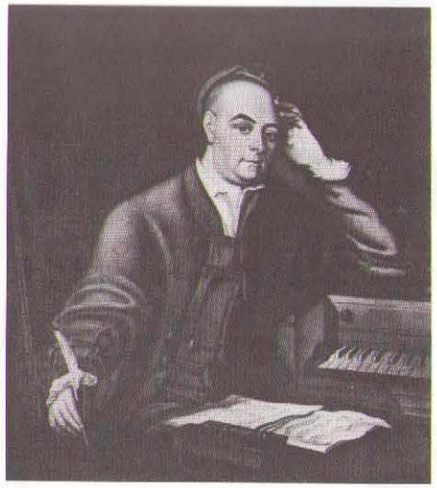
6曲から成る作品4のオルガン協奏曲は、ロンドン時代に劇場で上演された彼のオラトリオの幕間に小オルガンを用いて演奏されたものらしい。ピーター・ハーフォードのオルガンとジョシュワ・リフキン指揮コンセルトヘボウ室内管（D）の演奏はオランダのパペンドレヒトにあるベッレヒム教会のオルガンを使用しているが、大げさにはならない小粋で慎ましやかな表現が好ましい。即興の部分はハーフォードのアド・リブだという。

◎ハープ協奏曲変ロ長調作品4―6

この曲はオルガン協奏曲第6番の異稿である。リリー・ラスキーヌとジャン＝フランソワ・パイヤール指揮パイヤール室内管（Er）は、典雅ながらラスキーヌの明快なハープのソロが際立った演奏で、珠玉のような小品にふさわしい。

◎ヴァイオリン・ソナタ集作品1

ヘンデルのヴァイオリン・ソナタは6曲あり、作品番号1としてまとめられた15曲のソナタ集に含まれている。そのうちの4曲を収めたのがヨセフ・スーク（vn）とスザナ・ルージイッチコヴァ（cem）の録音（Den）である。スークのヴァイオリンはあくまでも瑞々しく、チェンバロの深い響きを得て生命感溢れる永遠の名演になっている。現在では19世紀に編纂された旧ヘンデル全集の作品1は、全部がヘンデルの真作かに疑問が持たれているが、ヒロ・クロサキ（vn）とウィリアム・クリスティ（cem、org）の演奏（Virgin）は作品1からの5曲に別の2曲を加えている。2人はピリオド楽器アンサンブルのレザール・フロリサンのコンサート・マスターと指揮者との関係にあり、良く歌うヴァイオリンと弾力性あるチェンバロのコンビはもぎたての果物のように新鮮で、現代に蘇った古典と言うことが出来る。



作曲中のヘンデル

◎オラトリオ『マカベウスのユダ』

ヘルムート・コッホ指揮ベルリン放送響・唱、エルンスト・ヘフリガー（T）、テオ・アダム（Bs）、グンドゥラ・ヤノヴィッツ（S）、ペーター・シュライアー（T）、ヘルタ・テッパー（A）（Berlin）

このオラトリオの第3部で歌われる合唱曲「見よ勇者は帰る」を聴けば、あの曲かと誰しもが思い当たるに違いない。具体的に言うならば、大相撲での優勝賜杯の授与の際や各種スポーツ大会の表彰式などで演奏される音楽である。その意味ではヘンデルの音楽では「ハレルヤ・コーラス」以上に一般に広く知られた曲と言えるかも知れない。またベートーヴェンがチェロのための変奏曲の主題に用いている。ただこの合唱曲は174年の初演時にはなく、後に別のオラトリオから転用されたものである。ヘンデルの生前には『メサイア』に次ぐ人気を誇ったオラトリオだが、現在では実際に演奏される機会は少ない。ドイツ語訳版ながらこのCDはその渇を癒すに十分な名演である。

◎オペラ『ジュリアス・シーザー（ジュリオ・チーザレ）』

ウィリアム・クリスティ指揮エンライトゥメント室内管、グラインドボーン唱、サラ・コノリー（Ms）、ダニエル・ドゥ・ニース（S）、パトリシア・バードン（Ms）、アンゲリカ・キルヒシュラーガー（Ms）、他（Den）

2005年のグラインドボーン音楽祭で上演されて話題になった、デイヴィッド・マクヴィカー演出のライヴDVDである。ドゥ・ニースの魅力的なクレオパトラも見どころだが、何よりもクリスティの指揮する雄弁な演奏が大きな説得力を持っている。コノリーのチェーザレもカエサルらしい風格がある。CDではマルク・ミンコフスキ指揮ルーヴル音楽隊（Arch）がコジェナー、フォン・オッターなどの名歌手を揃えた名演である。

◎オペラ『セルセ（クセルクセス）』

クリストフ・ルセ指揮レ・タラン・リリク、ルートヴィヒスハーフェン歌劇場唱、ポーラ・ラスマッセン（Ms）、アン・ハレンベリ（Ms）、イザベル・バイラクダリアン（S）、サンドリーヌ・ピオー（S）、他（Euro）

ミヒャエル・ハンペ演出によるドレスデン音楽祭でのライヴ映像である。冒頭でセルセが歌うアリオーゾ「オンブラ・マイ・フ（緑の木陰よ）」が飛び抜けて有名なので、この曲についてのみ簡単に記す。このDVDではメゾ・ソプラノのラスマッセンが歌っているが、独立した曲として歌われる場合は、カウンターテノールが歌う他に、かつてキャスリーン・バトルがCMソングとして歌って一世を風靡した（K）。彼女のようなリリック・ソプラノの他にテノールも歌うし、「ラルゴ」としてオーケストラや器楽でも広く演奏される。